

# KAGAKU [科学]

Vol. 72 No. 5 May 2002

p518-p529

対談：科学と芸術をつなぐもの  
言語としてのランドスケープ

Anne W. Spirn x 武内 和彦

発行：岩波書店

## 特集 ランドスケープ

## 対談 科学と芸術をつなぐもの

## 言語としてのランドスケープ

アン・W・スパーン氏は、「都市と自然環境」のかかわりに新しい光をあて、文化芸術の視点を導入した業績により、2001年コスモス国際賞を受賞されました。その授賞式のための来日の折に実現したのが、旧知の武内和彦氏とのこの対談です。都市を自然の一部としてランドスケープを考えてきたスパーン氏と、科学的にランドスケープを捉えてきた武内氏。都市と自然、科学と芸術をつなぐ言語としてランドスケープを考えることは、環境をどう変えて行くのでしょうか。

アン・W・スパーン 武内和彦



Anne W. Spirn

マサチューセッツ工科大学都市計画学科(ランドスケープ・アーキテクチャおよびプランニング)

たけうち かずひこ

東京大学大学院農学生命科学研究科(緑地環境学)

## 都市と自然

武内——スパーンさんは、2001年コスモス国際賞の受賞記念講演でも「都市は自然の一部である」と言っておられますね。なぜそうなのか理解できず、批判する人もいたと聞いていますが、いつ頃からそのような考えられるようになったのですか？

スパーン——実は不思議なことに、子どもの頃からずっとそう思っていたのです。そうではないと、家族やほかの誰からも言われたことはありませんでした。都市の中で楽しんだことの多くは、私の家から通りを下ったところの空き地にあった草地と果樹園のような自然が対象だったのです。

武内——それは生まれ故郷ですか？

スパーン——そうです。シンシナティです。'The Granite Garden'(邦訳:『アーバンエコシステム』、(高山啓子訳)公害対策技術同友会、1995)の前書きでも少し触れていますが、子ども時代、私は外でばかり遊んでいて、木の上に家を作ったり、通りで水遊びをしたりしていました。町はずれは開発されつつあって、森に続いていました。シンシナティは渓谷にある都市で、私が大都市に出ていく歳になったころには、私が好んでいた場所のひとつは川の中になっていました。

そういうわけで、都市が自然と分断されたものとは、私には決して思えないのです。大学に行くようになると……。

武内——ハーバード大学ですね？

スパーン——そう、最初はハーバードです。そのころになっても、ほとんどの人はそんなふうには考えていないということが、私にはわかっていなかったと思います。ところが、ペンシルベニア大学のランドスケープ・アーキテクチャ学科にいてから、イアン・L・マクハーグ(Ian L. McHarg, 'Design with Nature'の著者)が「都市というのはひどい場所で、反自然的である」と言うのを聞いたのです。それは私が都市について考えていることとは違うと思って、クラスメイト何人かとペンシルベニア大学の教授達に「なぜ私たちはいつもエコロジカルなデザインを勉強して、田舎の計画をするのですか？なぜいつもエコロジーに配慮した新しい街をデザインして、都市を見ないのですか？」と尋ねたのです。教授達は、私たちが都市の自然を十分に知らないし、都市のエコロジーに関する情報も持っていないからだと言いました。それで、私はクラスメイトの1人と都市部をテーマに研究し、都市のエコロジーを理解できること、都市においてエコロジカルなデザインができることを実証することに決

めたのです。それが私の学部と修士における研究テーマでした。

大学を卒業して会社で働きはじめると……。

**武内**——会社という？

**スパーン**——Wallace, McHarg, Roberts and Todd という新都市開発を専門とする会社です。そこで私たちが手がけたプロジェクトのほとんどはエコロジーに配慮したリゾート開発、エコロジーに配慮した○○○……というもので、私はそこでの仕事に全く困惑してしまいました。環境に関わるということと、土地を新たに開発する仕事に従事することは、ひどく矛盾しているように思えたからです。しかもそうした土地は、何かを建設しては絶対にいけないような場所だったのです。

**武内**——つまりその会社では、エコロジカルと言いつつ、自然を破壊していたというわけですね……。

**スパーン**——まさにその通り、全くの矛盾です。とてもエコロジーに配慮した方法で、決して開発してはいけないような場所を開発するわけです。それで、私が思ったのは、都市がもっと魅力的であったなら……。

**武内**——人は今の都市でも生きていける……。

**スパーン**——そうです。おそらくみんな都市に戻ってくるでしょうし、都市を離れることもないでしょう。農地や湿地のような場所にそれほど建設しなくてもすむようになるでしょう。悲しいことに、現在アメリカでは、1970年代の住宅難が解消されてしまったため、新しく開発すれば、どこか別の場所に見捨てられた空き家ができてしまうのです。私がフィラデルフィアに住んでいたころ、10年の間に都心では空き家と空き地がどんどん増えていく一方、同じ時期に都市の周辺の農地には建物が建てられ続けていました。私はこの矛盾にずっと悩まされ、それで結局‘The Granite Garden’を書くことになったのです。

**武内**——おそらくあなたの考えは、計画された都市というものを批判することにつながるでしょう。というのも、都市の外に理想の都市を造ったところで、既存の都市問題を解決することにはならないからです。

**スパーン**——実際そうです。これについては、1900年代のはじめにパトリック・ゲッデス(Patrick Geddes, 1854~1932)とエベネザ・ハワード(Ebenzer Howard, 1850~1928)が論争していて、ゲッデスは既存の都市を理想的な都市に再開発することを主張し、ハワードは既存の都市の外に新しい理想都市を建設することを提案していました。これはとても有名な論争になりました。ゲッデスの言った「ここになけ

ればどこにもユートピアはない」というのは、既存の都市が理想郷になるべきだし、見捨ててはいけないのだという意味です。実際、ゲッデスが当時働いていたスコットランドのグラスゴーとエディンバラでは、都心に空き地がありましたが、彼は地域社会と協働して都市のランドスケープを復活させたのです。

**武内**——あなたが指摘されたもう一つの重要な点は、都市の自然と言ったとき、それは緑地が存在するという意味にとどまらず、土、水、大気などが、正常な状態にあることを含んでいるということです。こうした認識は、私たちが都市の自然破壊を考える上で非常に重要だと思います。その点についてお話いただけますか？

**スパーン**——今、非常に良くまとめてくださったと思います。付け加えるとすれば、プロセスについて考えることが重要だということです。私が自然の要素とか機能と呼ぶものは、単に川、樹木、動物といったものだけでなく、水が流れること、植物が生長すること、風が吹くこと、日が照ることなど、都市で生じるすべての物質や廃棄物の循環プロセスについても、人間や政治や経済のプロセスと不可分に結びついた自然のプロセスとして考えられるということなのです。

**武内**——人が自然に及ぼす変化について、どのように考えればよいのでしょうか？ 肯定すべきか、否定すべきか、その両方でしょうか？

**スパーン**——両方でしょう。また重要な点を指摘していただきましたが、だからこそ私にとっては環境変化の歴史が重要で、そのために都市の環境が何百年も歴史と共に変化してきた経緯を研究しているわけです。日本では何千年という単位になるでしょう。そうした研究によって、それぞれの都市における自然の基本構造と、それがどのように変化してきたか、またこの先どのように変化し続けるかが理解できますし、なぜ都市の自然が都市の文化でもあるのかわかるのです。実際、都市において自然と文化は不可分なものなのです。

**武内**——人間の活動は自然の文脈を読み解いた結果であると解釈できるというわけですね……。

**スパーン**——そうです。読み解き、それに呼応しているのです。

**武内**——あなたの本で興味深いのは、フレデリック・L・オルムステッド(Frederick L. Olmstead, 1822~1903)の業績を評価するに際して、彼が公園と緑道をつなげたパーク・システムを作りあげた点にとどまらず、劣悪な都市環境を改善したという点を強調すべきだと述べている点です。たしか、あなたの本ではマ





記号例

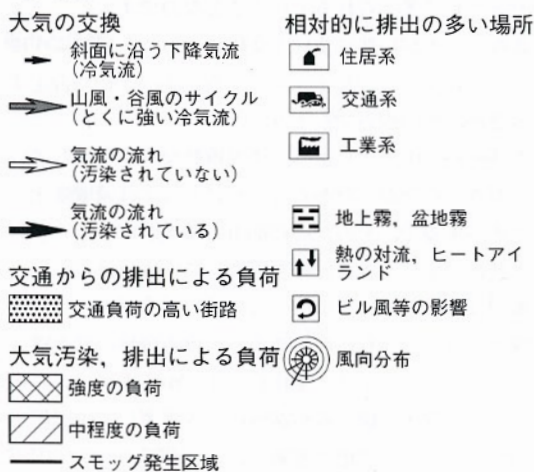


図1—「風の道」計画のための気候地図。出典 シュツットガルト都市計画局: Umweltatlas・klima (1991)。カラーページ参照。

ディ川の衛生問題の例を取り上げて、それが衛生改善計画であったことに注目すべきだと主張されていますね。オルムステッドは都市における自然現象をよく理解し、改善しようとしていました。パーク・システムはそれを実現するための手段であった。あなたの本を読んで私はそう理解しました。

スパーン—おっしゃるとおりです。非常によく理解しておられます。私にとって驚くべき事は、オルムステ

ッドが100~150年以上も前に、人間にとっての環境の健康状態について述べていること、人間が壊滅させたランドスケープを復元したことです。自然のランドスケープを復元し、そのうえ人々の健康を回復したのです。彼ははじめにマディ川の湿地や高水敷き(普段は水位よりも高い位置にある河川の敷地)の緑化を行いました。最初は失敗しましたが、やがて成功し、そして2世代を経るうち、河道が工事されたという事実は忘れられ、オルムステッドの貢献はこの美しい河畔林を保存しようとしたことだと思われるようになったのです。

武内—そしてそれを公園と結びつけたのだと……。スパーン—そうです。それが建設された場所が昔どうだったか、どのように建設されたのかが理解できれば、過去の歴史に立ち返り、環境を再構成できるのです。古い写真を見て、彼が仕事をする以前は、工業河川だったことがわかったのです。

武内—それが、あなたがマディ川に工事を施す直前の古い写真を紹介したかった理由なのですね。それは読者にとって実に効果的だったと私は思います。

スパーン—人間活動を、ただ悪い影響とだけ考えるのではなく、人間活動も……。

武内—自然を作り出したり、自然のプロセスと同化したりすることができるというわけですね。この考え方は、日本人にも大きな影響を与えたいと思います。花と緑の博覧会の招待講演で、あなたがシュツットガルトの「風の道」計画(図1)について紹介されたとき、都市計画家の伊藤滋教授や当時の建設省の役人たちが、その考え方の重要性を理解し、日本の政策に取り入れようとしたことをご存じでしたか? 「風の道」の考え方は、日本の都市にも適応できます。水路や緑地を守るのは、歩行者の空間確保としてだけでなく、山から海に至る大気の流れを確保して自然の構造を保全するためにも重要だからです。北九州、仙台、その他多くの都市で、この考えに基づく計画が進んでいるところです。

スパーン—それはすばらしい。知りませんでした。

武内—ドイツの考えがアメリカ人によって紹介されたのは面白いですね。そして、いまや多くの関係者、特に地方公務員がシュツットガルト詣でに出かけています(笑)。

スパーン—それはそれは(笑)。

武内—シュツットガルトの事例紹介に続いて、都市の環境改善に関連した新しいアイデアをお持ちですか?



スパン—‘The Granite Garden’が1984年に出版されると、多くの人から、あなたの考え方は新しい街を開発するには適用できることは分かるが、すでに建設されている既存の都市についてはどうだろうかと思われられました。そこで私は既存都市にも適用可能であることを示そうと思いました。ハーバードにいたときにボストンで始めた仕事を例にすることに決め、それから2,3年後にペンシルベニア大学に移ったので、フィラデルフィアにそのアイデアを持っていきました。1986年からウエストフィラデルフィアのコミュニティで仕事をしていた、MIT(マサチューセッツ工科大学)に移ってからずっとその仕事を続けているのです。

都市における問題の多くは社会的、経済的なものであり、アメリカでは都会に貧しい人々が集中して、失業、教育、衛生等、非常に困った問題が起きていますので、環境問題があったとしても、それにどう注意を払えばよいのかという点も、私の関心事でした。そこで私が自分に課したのは、誰もが理解できる考え方を採用して既存都市の再開発が可能であることを示してみせるということでした。この仕事を始めて最初に私が気づいたのは、アメリカの都市では、低所得者層の住んでいる近所には多くの空き地があるということでした。そこは、かつては家や工場があったのに、いまは見捨てられ、建物がなくなってしまったのです。そうした地域で仕事をして初めて分かったのは、空き地はランドスケープの中に均一にあるのではないということです。都心のなかでも、ある地域にはほとんど空き地がないのに、別の場所はほとんど空き地になっているのです。そして、私は谷底と空き地に非常に深い関係があることをみつけました。環境史をふりかえると、そこには古い氾濫原があり、初期には山腹と山頂が、その後には谷底が開発されたことが分かりました。谷底には、主に賃貸向けの安価な住宅が建てられ、建てて10~20年後には空き地ができてはじまりました。そこで私は古い新聞記事を調べ、住宅の陥没に関する話を見つけました。

このことは、実際に1960年代に策定された計画にのっとり、氾濫原を埋め立てたのち再開発する計画を立てていた都市計画家にとって非常な驚きでした。私はこの小河川の氾濫原の埋め立て地を特別な植栽区域とし、再開発をやめて今後とも空き地として維持し、洪水を一時的にためる場所にすることを提案しました。‘The Granite Garden’にこれと似たデンバーの例をあげてありますが、暴風雨のあとで洪水が氾濫するの

を防ぐために、水をためておく窪地が作られました。フィラデルフィアでは、洪水が氾濫することよりも、下水道に問題がありました。下水道が、排水のみでなく、洪水の放水という機能も持たされていたのです。暴風雨のあとでは、排水と洪水をあわせて大量の処理水が発生します。おそらく日本でも同様だと思いますが、都市の飲料水となっている川に直接そうした水を流さざるを得ないという問題が生じていたのです。私の提案は、谷底の空き地を貯水に使い、2,3日をかけて徐々に下水に流すというものです。そうすれば下水道で処理できます。これで下水道を整備しなくてよくなったのですが、当時フィラデルフィアでは、技術者がお金で、貯水用の巨大タンクを地下に建設しようとしていました。私は、「どうして地下に作るのですか、大金を費やしても、洪水用の下水道を新たに作らなくてよいという以外の利点はありませんよ」と言いました。「地上に水をためられる場所をつくれれば、それほどお金はかからないし、公園、湿地、渡り鳥の留まり地として多目的に使えます。それに、学校の子供達にとっては、環境教育の場になるし。実際、ここは空き地ではないですか。そこかしこに空き地がいっぱいあるのに、理科の授業では自然観察のために都市の外へ連れて行く。一方で、ここは空き地だらけ……」

武内——都心なのに(笑)。

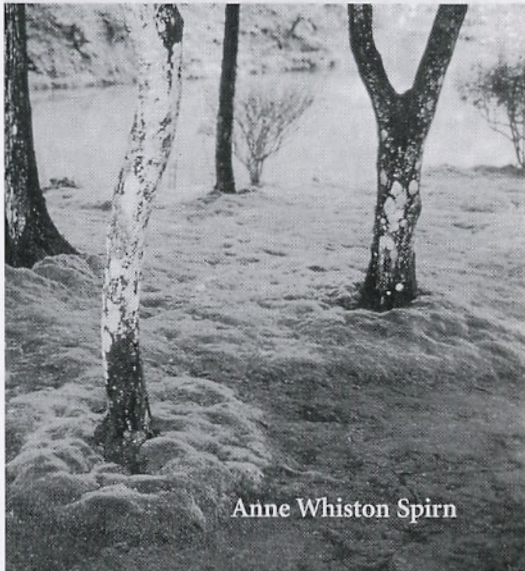
### ランドスケープの言語

武内——つぎに、あなたの2番目の本である‘The Language of Landscape’についておうかがいしたいと思います。まずお聞きしたいのは、この本のタイトルも謎めいていますが、さらに謎なのは、なぜ表紙が西芳寺なのかということです(図2)。最初の本ではボストンの写真を使っておられたのに、突然表紙の写真を日本に変えられたのはとても意味深長ですね。

スパン——1990年に日本を訪れたことは、私にとって非常に重要でした。言語としてのランドスケープについて考えはじめたばかりで、それは‘The Granite Garden’から出てきた考えでした。何人かの同僚に尋ねられたのは、‘The Granite Garden’は衛生と安全と福祉についてはすべて語られているが、芸術はどうなっているのかということです。私は、芸術についても語っている、といいました。それで、次の本では都市と自然の詩的な部分や、都市が自然の一部であることを理解すること、都市において自然のプロセスを感



## The Language of Landscape



Anne Whiston Spirn

図2—'The Language of Landscape'表紙。

じられる場所をつくることの重要性について書きたかったのです。

武内——では、最初の本はより科学的、2番目の本はより精神的なのですか？

スパーン——いいえ、2番目の本にも科学はあります。しかし芸術もあるのです。両方が含まれていればよいと……。

武内——両方の考えを形にした？

スパーン——そうなのですが、都市における自然の詩的な部分について書き始めて、それは都市というよりランドスケープについてだと気がつきました。そこで、考えたのは、「詩とは何か？」です。詩は言葉を暗示する。では、言葉とは何か？ そうして、ランドスケープの言語という概念にたどりついたのです。それは私にとって、価値と思想を文字で表さずに表現する方法だと思えました。私たちは、ランドスケープを作り出すことで、政治思想や社会的価値、個人的価値を表現しています。つまりランドスケープはある意味で言語なのです。私は、ランドスケープそのものから出てきたアイデアを発展させることにしました。そして、もしそれが言語だとすると、すぐれたデザインというだけにとどまってはいけないと思いました。おそらくランドスケープ語による文学というものがあり、パツ

ハやシェイクスピアのような世界的に偉大な音楽や文学があるでしょう。それが西芳寺であり、ストックホルムの森林墓地であり、セントラルパークです。しかし一方で、日常会話のように、普通の人々が作っているランドスケープもあるのです。そして、それは文化の違いを超えたものとなるはずですが、もし私が正しくて、ランドスケープによる言語があるならば……。

そこで、私は最初に研究をはじめたウエストフィラデルフィアで一般の人を対象に調べはじめました。この考えが人々と意志を通じる助けになれば、また、ウエストフィラデルフィアの人々にとって意味があれば、別の場所、別の文化でも調べようと思いました。アメリカやヨーロッパだけでなく、オーストラリアの砂漠平原、日本の森のようなところでも。それで、私が1990年に日本に来た時に、私の頭の中では関連した新しい考えが生まれていました。ランドスケープの言語という言葉は1989年に最初に使っただけだったのですが、調査の枠組みはできていて、もし私が正しければ、日本のランドスケープをランドスケープの言葉として意味があるものとする何かが必要だと考えたのです。そこで、樹木、岩石、植物といった素材を要素として頭に入れました。動き、成長、教育、学習、工芸、礼拝、建築、貿易といったプロセス、私が形態と構造とよんでいるものです。さらには、領域、中庭、小径、境界、入口、逃げ場、眺めといった、私がパフォーマンスの基礎とよんでいるものにも及びました。そして日本を巡りながら、こうした考えが日常の風景や庭園において適用できるかどうか調べていったのです。その結果、すべて理解できたわけではありませんが、ある枠組みでものを見ることで、それまで見えなかったものが見え、あなたをはじめ案内して下さった方々に質問することができたわけです。なぜこうなっているのか？ なぜここに境界があるのか？ 入口と境界を挟んだあちら側とこちら側の領域の関係は何か？ そして、石組や樹木や水がどのように使われているかにも注目しました。

武内——日本の言葉を見ることで、自らのランドスケープの文法を試そうとしていたのですね。ところでお伺いしたいのですが、西芳寺がもともとどのように日本庭園として設計されたのではなく、うち捨てられて苔が生えてしまってあのようなことをご存じでしたか？ もちろん、庭園を設計する過程では、人間の意図が強く働くわけですが、多くの魅力はうち捨てられた後に現れてくるものなのです。

スパーン——それは知りませんでした！ それを伺って



[対談] 言語としてのランドスケープ／アン・W・スパーン×武内和彦

図1 「風の道」計画のための気候地図。

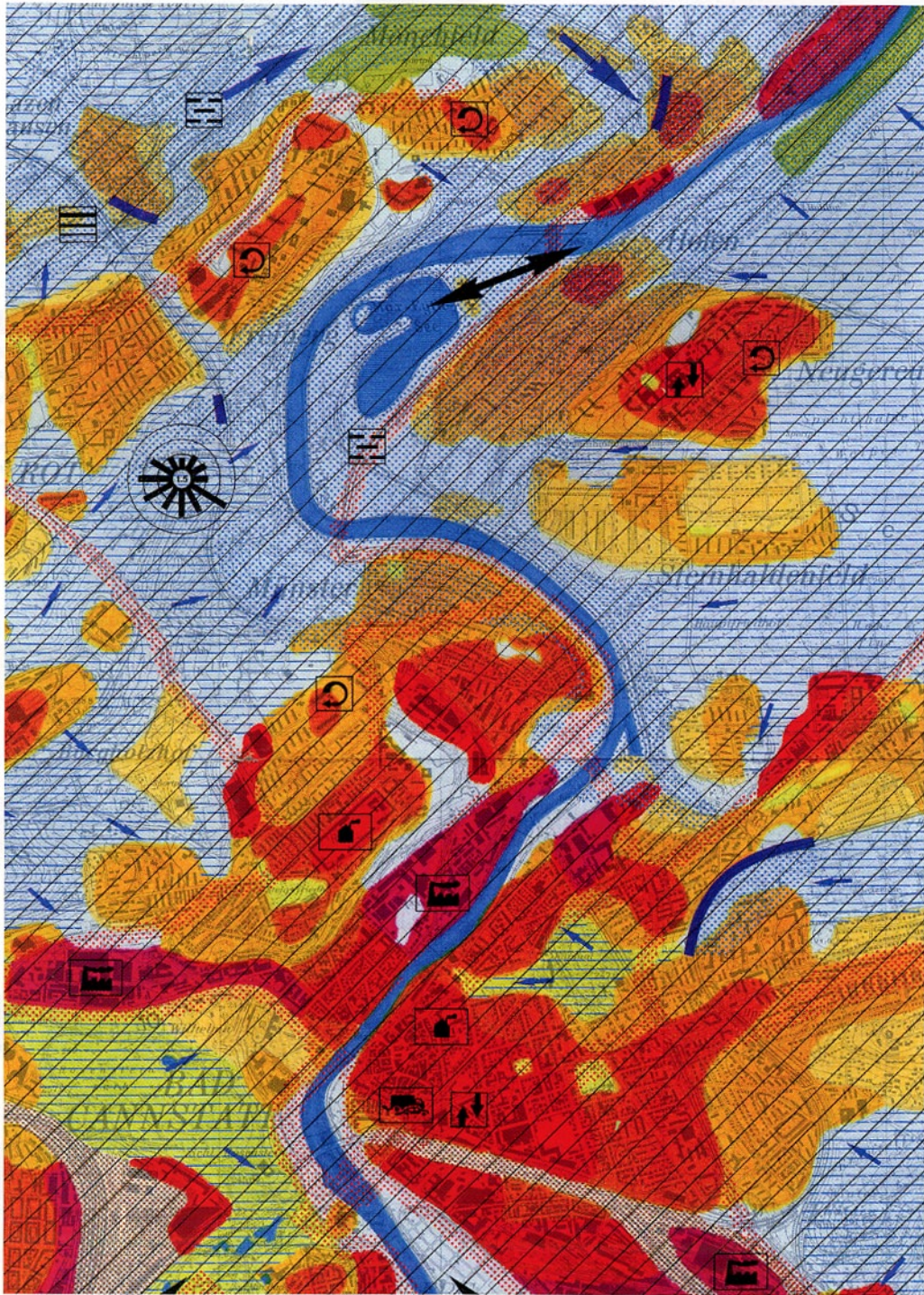








図6(a) — 広島市の水辺の景観保全。広島市リバーフロント建築物等美観形成協議対象地区の指定状況。

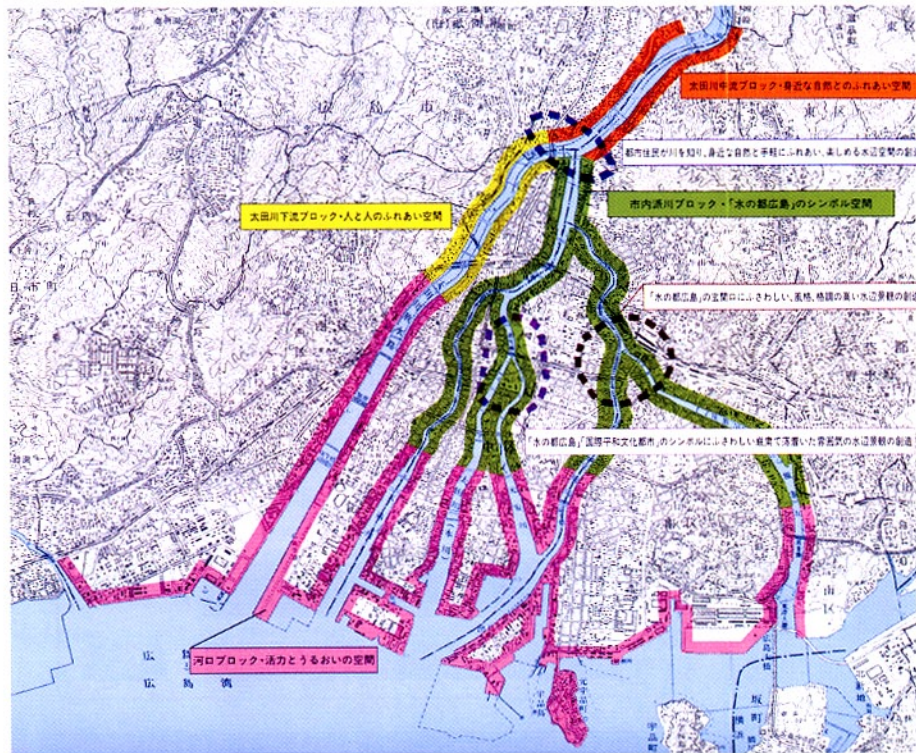


図7(a) — 柳川市の堀割。中心部に柳川城があり、有明海に隣接した水都として今も水辺が大切に保全されている。

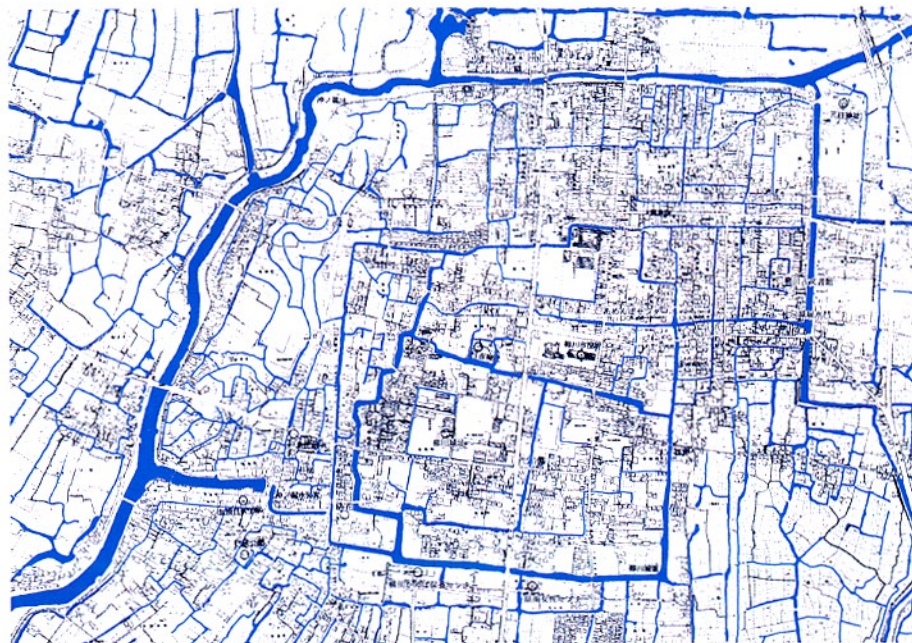
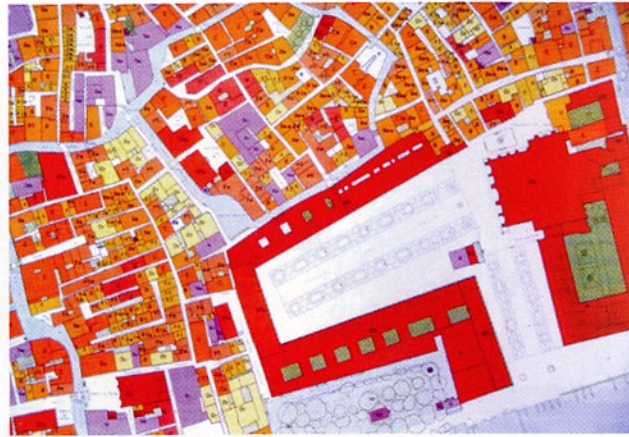


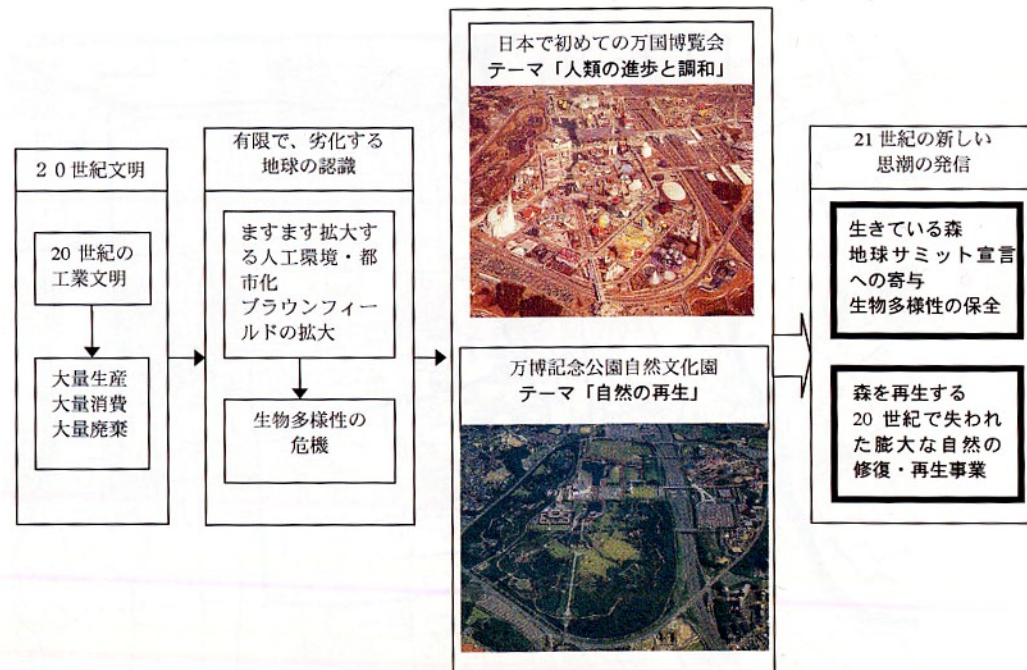


図8 — ヴェネツィア市都市計画図におけるティポロジアの表示。



### みえない時代における「第三の自然」の創造／吉村元男

図3 — 20世紀の後半から再生された万博記念公園の森は、地球環境時代の21世紀の新しい思潮を担っている。





さらに興味深く感じました。なぜ日本の庭園を表紙に選んだかと言うと、実は、もしかするとオーストラリアだったかもしれないのですが、私はいくつかの写真を用意して、最終的には出版社がそのなかから1つを選んだのです。私はその選択に満足しました。西芳寺は人間の干渉に対する自然からの答えだと思えます。

### 科学と芸術

**武内**——つぎに、ランドスケープをどうデザインするかについて伺いたいと思います。この対談が掲載される雑誌の名前は『科学』ですので、科学とデザインの関係をどのように捉え、どうつないでいったらよいのでしょうか？

**スパーン**——そうですね、私にとって、2つは非常に近い関係にあります。私は科学者ではありませんが、科学者と仕事をしています。それは日本にいるときのように、私の知らない場所で、案内人がついてくれるようなものです。聞きたいことがいろいろあるけれど、自分ではよくわからない。しかしすばらしい専門の案内人がいれば、いろいろ聞けるし、会話もできるので、結果としてより多くを学ぶことができます。私はそのようなやり方で、地質学者、ランドスケープエコロジスト、水文学者、土木工学者と仕事をすることにしていました。科学者、特にフィールドサイエンティストと出かけるのはすばらしく、彼らの目を通してものを見、質問をし、そして彼らも私たちの目をおして見るのです。彼らとしても、私たちが彼らにとっては考えもしなかった質問をするので、もの見方が微妙に変わり、少し違った理解をするようになるのです。科学者の多くは質問を考え、それから答えを探し、また質問を考えます。よい計画は答えと同じくらい多くの質問を生みます。だから、私は科学者と非常に緊密な関係を持って仕事をしています。

**武内**——あなたは、科学と芸術はとても近いものだとお考えですか？ 多くの人は科学と芸術は非常に遠い存在だと思っていますが、あなたの考えでは科学と芸術はランドスケープの言語を使えば統合できるにちがいないのですね。

**スパーン**——2つは近い存在です。共通の場所と共通の言語を見つければ、科学者になぜその領域に踏み込んだかを聞くと、ほとんどの場合、その背後にそのテーマに対するある種の情熱が感じられ、それはまことに審美的で、精神的で、しばしば理念的であると私には思われるのです。それゆえ、この2つはそれ

ほどかけ離れたものである必要はないと思っています。生態学者の中には優れた写真家でもある方が何人かいて、美的なセンスとランドスケープのプロセスやパターンについての深い洞察力を兼ね備えています。そうした能力は科学にとっても非常に重要だと思います。**武内**——とくにランドスケープエコロジーではそうですね……。

**スパーン**——おっしゃるとおりです。地質学者もそうです。どんなフィールドサイエンスでもそうだと思います。パターン認識が芸術に結びつきます。それは、デザインや計画に適用できるものです。

**武内**——不幸なことに、日本ではランドスケープという概念を理解することはややむずかしいのです。ランドスケープとは、単なる視覚的な事象にすぎないと理解している人もいます。よいランドスケープとか、悪いランドスケープとか。しかし生態学の専門家はランドスケープを科学的な問題だと理解しようとしています。だから、ランドスケープとは何か定義しなくてはいけなし、いったん定義したら、他のたくさんの意味は忘れなくてはいけないのです。しかしランドスケープという概念は科学的な面と審美的な面の両面を含んでいます。

**スパーン**——言葉と言葉の歴史が非常に重要だと信じている私の立場からお尋ねしたいことがあります。私は「ランドスケープ」を「環境」と故意に対比させて選びました。英語ではその2つには非常に違ったニュアンスがあるからです。英語の 'landscape'、あなたがよくご存じのドイツ語では 'Landschaft' ですが、どちらも英語、ドイツ語の最も古い意味としては、単に土地を形づくるという意味だけではなく、共同体という言葉と同一起源なのです。ドイツ語や英語のランドスケープは、もともと人と土地が共にあるという共同体に由来しているのです。環境は、それに比べて、いくぶん抽象的で、より最近の言葉です。私は具体的な言葉が欲しかったのです。「環境」は、しばしば人間を含まない自然環境の意味に使われますが、私は「ランドスケープ」を用いることで、自然だけでなく、審美的な意味、政治的文化的な意味を内包した言葉を使いたかったのです。日本では、ランドスケープを訳すとすればどんな言葉になりますか？ その言葉はどんな意味を持っていますか？

**武内**——西欧の言葉を日本語に置き換えるのは難しい問題です。'nature' という言葉を例にとると、それは日本語では「自然」と訳されています。しかし、その意味するところはだいぶ違います。西欧の概念では、



自然は人間の外にあるものですが、私たち日本人は、西欧の概念が入ってくる前は、自然を「しぜん」ではなく「じねん」と呼んでいたのです。「じねん」という概念は、人間も含めて生きとし生けるものすべてが自然の一部であるという考え方で、「nature」の訳語としての「しぜん」とは異なります。その結果、いまでも概念の混乱が見られるのです。ランドスケープについても同様です。最初にランドスケープがドイツ語の翻訳として日本に紹介されたときから、概念の混乱が生じたのです。その切っ掛けとなったのが『景観地理学講話』(地人書館, 1937)でした。

スパーン—著者は誰ですか？

武内—辻村太郎という人で、東京帝国大学の助教授でした。彼は‘Landschaft’の概念を日本に紹介しようとして、苦勞しました。ドイツ語の‘Landschaft’に2つの意味があるからです。1つは地域の総体、もう一つは風景という意味です。彼はこの本の中で「大體に於て眼に映ずる景色の特性と考へて差支ない」「混同を防ぐ爲に此所では地域の意味を含ませない」と書いています。そして彼は、植物学者の三好学提唱による「景観」の訳語を、風景の意味合いで定着させたのです。したがって、私たちがランドスケープを「景観」と訳すと、日本語としての意味が変わってしまいます。それで私はいまでは「景観」と訳さずそのまま「ランドスケープ」と言っているのです。私はドイツ人もランドスケープと言うべきだと考えています。私の意見では、ランドスケープは英語でもドイツ語でも日本語でもない、国際的な言葉、共通語なのです。

スパーン—私もあなたの意見にまったく同意します。

武内—‘landscape’をランドスケープとカタカナ表記することが徐々に浸透し、今では、ランドスケープという言葉はとても一般的になりました。

スパーン—日本語でもランドスケープをそのまま使うようになったのですか？

武内—そうです。ランドスケープと言えはいまや誰でもわかりますし、景観という狭い訳語よりよいと思います。日本語で景観と言えは、例えばここから見えるビルの形とか、壁や車の色といったものだけを指しますが、ランドスケープと言えは、空気や地面なども含まれるでしょう。そのほうが、あなたのランドスケープの考えにずっと近いのです。

#### 写真が写し出すもの

武内—つぎに、現在執筆中の‘Telling Landscape’

という本で、あなたは何を伝えたいのでしょうか？

スパーン—‘Telling Landscape’は、ランドスケープをより深く見て理解する方法として写真を使うというものです。調査の形式として写真を使うことで、科学と芸術を結びつけようというわけです。私が撮影した50枚のカラー写真があって、節に分けられ、それと5つの小論からなりたっています。小論の1つは光についてで、詳細なものがすべてを語ると私が考えているものの1つです。ほかの小論としては、場所や存在感といったものがあります。人間以外のものからも生氣のあるなしを感じとることすらできます。共感についても書いていて、それは自らの意識が他の場所やものへと投射されることで、写真を撮っているとしばしば起こる現象です。

武内—IT時代における新しい写真の役割についてはどのように考えておられますか。ほかにたくさん視覚的な表現をもたらすツールがあるときに、まだ写真を撮り続ける必要があるのでしょうか。

スパーン—そうですね、写真は私がランドスケープを理解する方法であると考えています。この本で、写真が、単にきれいなスナップ写真を撮るだけのものではなく、言葉や統計を使わずにランドスケープを理解する方法、また調査の形式として使われる切っ掛けになればと願っています。今、MITで「調査としての写真」という講義をしていて、学生達は写真を調査の手段として使っています。

武内—その講義は都市計画学科のものですか？

スパーン—都市計画学科だけでなく、さまざまな学科、公共政策学科や建築学科の学生も含まれます。私は学生に対して、写真に関する知識の取得を全く要求しません。写真はただ道具として使うのです。ですから、本と同じように、写真は理解を促すための非常に重要な方法です。

武内—ランドスケープの重要な部分を排除しない理解の仕方なのですね。つまりランドスケープは科学的に理解することができるでしょうし、言葉を使っても理解できるでしょうが、同時に、写真によって単独で理解することも必要だということですね。

スパーン—そのとおりです。そして、アイディアを深めるのは、写真を撮ることだけでなく、たとえば、写真を撮れば、光について非常に敏感になりますし、光の移り変わりを理解しはじめます。私のクラスの学生には、最初の2週間は写真を撮らせず、1日6回記録をつけて、光を観察するということさせます。外に出て、朝起きてから夜寝るまで、6回も、光について



気がついたことなどを記録させるのです。

**武内**——それは学生が都市の自然を理解する良い方法ですね、理解し始めますね。

**スパーン**——そうですね、彼らは、そうする前はほとんど何も見ていなかったことに気づいて驚きます。いったん写真を始めると、常に光が変化していることがわかります。それから、彼らはそれぞれ場所を選んで、学期の3か月間、ずっと写真を撮ります。はじめはその場所で1日のうち違った時間の光と、植物およびその場所全体がその光にどう反応するかという特徴を捉えます。次に学生に指示するのは、細かい部分を写し出す写真を撮って、ランドスケープを形作る自然的、政治的、経済的プロセスに関するもっと大きなストーリーにつなげさせるということです。写真を使うことはランドスケープをより深く理解することになります。

**武内**——もちろん、人はそれぞれの認識過程を経てランドスケープを理解することになるので、理解の仕方は異なってくるでしょうね？

**スパーン**——そうですね、学生はフィルムを通して見ることと自分の目を通して見ることの違いがわかります。多層になっているのです。私は、科学者が調査の手段として写真を使った例を集めていて、それは非常に興味深いものです。19世紀から、科学者は写真を使ってきました。天文学者に地質学者……。

**武内**——そこでまた歴史に戻るわけですね。

**スパーン**——いつもそうなんです。歴史の理解なしでは仕事できません。

**編集部**——ところで、あなたにとって一番好きなランドスケープはどこですか？

**スパーン**——それは難しい質問です。ちょっと視点を変えてお答えしたいと思います。私が最も惹かれるランドスケープとは、パラドックス的なランドスケープです。人間活動と自然のプロセスの足跡を同時にもつものなのです。私の好きな西芳寺の苔について武内さんが言われたことがよりあてはまるでしょう。パラドックスはたいへんな力をもつのです。苔が静かでありながら今も成長している、動きがわかるけれども動いてはいないというパラドックスが好きなのです。それから落ち葉が見えないとします。しかしそこは森なのになぜ落ち葉がないのでしょうか。あなたは誰かが来て掃いたことに気づきます。それはそんな以前ではありません。なぜなら森では常に葉が落ちているからです。私を最も惹きつけるランドスケープとは、明らかに目に見えない要素を感じることができ、人間と文化のプロセスと自然のプロセスの間にパラドックス的な関係がある

ものです。疑問を引き起こし、謎のあるランドスケープです。日本のランドスケープに惹かれる理由の1つがそれで、日本のランドスケープはパラドックスに満ちているのです。バイオレンスによって自然の構造が作られたランドスケープです。それらは、火山、侵食、洪水、台風、波食海岸などです。しかし旅行し山の上から見下ろせば、落ち着いたランドスケープのように見えます。それを作ったバイオレンスと見かけの落ち着きの間にあるパラドックスです。オーストラリアの環境や、アメリカのいくつかの環境を見ても同様のことが言えますが、私がかメラを持ち出したくなるような何かがあるのです。そこで私は、日誌を取り出して書き始めたのです。

**武内**——日本の自然は2つの面をもっているとずっと考えていて、1つは暴力的な面、一方はおだやかな面です。これには、危険な火山と心地よい温泉という例がまさにあてはまります。自然の脅威と恵みをともに受け止めていくのが、日本における自然とのつきあい方だと考えています。

**スパーン**——その通りですね。1990年に日本に来て、私は日本のランドスケープにすっかりはまってしまいました。それは私の考え方がうまく日本にあてはめられたということだけではなく、私が見出したパラドックスのすべてが、自ずからランドスケープの魅力を最大限に高めていることが分かったからだと思います。

**武内**——今日は示唆に富むお話をいただいて、どうもありがとうございました。

**スパーン**——私の方こそ、すばらしい会話できて本当にありがとうございました。



2001年10月 東京にて



